

パスカルにおける『イエス・キリスト』

東 宏 治

第一章 パスカルの思考

T・E・ヒュームの言葉に、コペルニクス以前、人間は決して世界の中心ではなかった、コペルニクス以後に人間は世界の中心となったのだ、というのがある。これは、地球が宇宙の中心であるとの「天動説」をとっていた中世は、実は「神」を中心とした時代であったが、コペルニクスの「地動説」は、かえって人間中心主義のルネッサンスをもたらしたことを逆説めかして言ったものであるが、ヒュームの言葉にはあまり諸誼はなく、むしろヒューマニズムへの痛烈な皮肉と復讐めいた気概が感じられる。

ヒュームは、ビザンチン・モザイクに初めて接したとき、そのなかにかたい、幾何学的な線や平面、ルネッサンス美術にみられるのとはおよそ正反対な非生命的なかたちを見出し、現代絵画とのある種のアナロジーを感じたという。この印象から始めて、彼が主にヴォリンゲルの説を紹介しつつ、歴史上、人間と外界との間の関係に大別して二つの態度があつて、一つは外界への恐れ、もう一つは外界との調和のそれであり、人類の美術史は、エジプト——ギリ

シア——ビザンチン——ルネッサンスの流れに沿って、前者の態度と後者のそれとを、むろんただ機械的に繰り返したのではないが、その前代の主要素を受け入れ変容しつつ、交代し発展してきたことを示していると述べたのは周知のことであろうか。彼はさらに、ルネッサンスに始まった人間中心主義が成熟し頂点に達したのがロマネスムの時代で、以後現代までヒューマニズムは下降しつつあり、現代は人間が外界ともはや調和を感じられなくなった時代であるが、パスカルはルネッサンス（広く言つて）のなかにあつて、すでに現代的な不安を知っていた、例外的な天才であると言う。ちなみにヒュームは、自分の以後述べる事柄は全て、パスカルを読むためのプロレゴメナにすぎぬと断っている。（T. E. Hulme: Speculations）

ぼくは、パスカルのものと考え方の根本的な姿勢のようなものを書こうと思つて、前記ヒュームを想起したのであるが、これは、一人の人間の思想とは、外界（対象）と彼との相対的な関係の（あるいは係り合ひの仕方の）表現であり、また対象をめぐつての彼の行動の軌跡であるためであらう。

パスカルとデカルトの思想の根底には、ヴォーリンゲルの言う二つの「世界感情」の間の両極性にも似た差異があるように思われる。

パスカルが外界(宇宙)に恐れを抱いていたことはよく知られている。しかしデカルトの場合、彼は外界と幸福な「調和関係」「親和関係」にあった。あるいはデカルトは、外界に無関心だったと言ってもいいし、少くとも、パスカルのように、外界に脅かされていると感じることは決してなかったろう。彼にとって外界は、自分(人間)の認識をまっしてはじめて存在する存在であり、人間の認識なくして、人間にとって外界は存在しないも同然なのである。つまり外界と人間の認識とは、外界の存在のための協力関係にある。

ところがパスカルにとって、外界とは、自分(人間)がいなくとも、確固として、敵としてそれ自体で存在する存在である。人間は死ぬが、外界はそれに係りなく存続する。ヴォーリンゲルは古代エジプト人には「物自体」という強烈な感情があつて、彼等は外界に対して本能的な恐れを抱いていたが、これらの感情や恐怖は、「抽象衝動」という形をとって彼等の内から強迫し、ピラミッドのような幾何学的、抽象的、合法的、かつ巨大なモニュマンを生みださせたのだと言ったが、パスカルにも外界への恐れという、彼等の感情とほとんど変らぬ観念があつて、これが彼を駆り立て、彼等のように、変転極らない外界から抽象した確固たる芸術を創造する代りに、絶対なものへと向わせたのである。

従つて、デカルトが外界をいわば観念(つまり認識によって得るもの)に換えて理解したのだと言えるなら、パスカルには、外界は依然として外界に変わりなかったのである。デカルトが真理を「私」

に、あるいは私の概念のなかに認めるとき、パスカルは真理を自然(外界)に、あるいは真理それ自体に帰する。

「自分が真理を語っていることを私に保証するところの「私」は考える、それ故に私はある」という命題のうちには、考えるためには存在しなければならぬことを私はきめて明白に見る、ということ以外には何もものもないことを認めたので、私どもがきわめて明白にきわめて判然と概念するものはすべて真だということを一般的規則とすることができると考えた。」(『方法序説』岩波文庫版 p.43)

「自然は、その全ての真理を各々それ自体の中に置いた。ばくらの技巧は、そのあるものを他のもののなかに閉じこめる、しかしそれは自然ではない。各々の真理は自分の位置を持つている。」(ibid. p.37)

外界がそれ自体で存在しているのだという意識は、自然科学者のパスカルを、「実験」を極めて重んじ、自分の自然研究の唯一の方法とする「実証的機械論者」にした。また自然科学と形而上学と問わず、パスカルの推理と論理が常に「事実」*faits*に基づいた、具体的な、即物的なものであるのも、ここに帰因する。

「自然の秘密は隠されている。自然は常に活動しているけれども、人がその現象 *phenomena* を常に発見するとは限らない。時間が、時代から時代へと現象を顕わにしてゆく。そして自然はそれ自体常に同じであるが、常に同じようには知られない。

その知識を与えてくれる実験はたえず増加している。実験こそ自然学の唯一の原理なのであるから、帰結もそれに比例して増加す

る。(『真空論序文』p. 231 B)

ここで彼は「自然はそれ自体常に同じである」といい、自然は秘密を隠しているとも書く。思い切った比喻で言う、「自然」は、丁度カフカの「城」のようなもので、彼はKが城の内部に入るための努力を決してやめなかったように、自然の「秘密」(真理)に至るため、自然の周辺を巡るわけであるが、彼が得るのは「現象」にすぎなくて、決して「自然それ自体」ではない。彼にとって「自然」(外界)は、知りつくしえない、たどりつけない、彼よりも巨きな、蔽とした存在である。

右のような一節から『パンセ』の例の「二つの無限」の断章を思い出す人もあろう。それにしても彼の外界考察は、常に、自ら好んで茫然自失するような場所に導かれるようである。「二つの無限」の断章(199—72)で、彼がいれば現実を横に深さという面で考察しているとすれば、今度は現実を横の拡がりに、多様なdiversitéという面で観察している断章もある。例えば彼は、人の声の調子、歩き方、咳の仕方、はなのかみ方、くさめの仕方、そんなものにも様々な段階と種類があり、ぶどうの品種はもろん一房の個々の粒さえ、あらゆる点でどれもこれも異なっている、などと書いている(558—114)。また彼は、遠くから見ると一つの都会が、近づくにつれて家々となり樹々となり、その葉っぱとなり草となり蟻となり蟻の足となり、ああ限りがない、これら全てが都会という名のもとに含まれているのだ、とも言う(65—115)。そこで彼は、外界とは「中心が至るところにあって周辺をどこにも持たぬ球体だ(199—72)」と表現するわけであるが、ここまで見てくると、事態がこう

いうことになるのも、どうやら彼(人間)自身に原因するもののよう
に思われる。彼が現実を多様にし、あるいは無限を生みだすのだ。
何故、パスカルの外界に関する考察は、常に「無限」に達着せざるを得ないのか。こんな現象はデカルトの場合には起っていないのであるから、ばくはここで再び二人の文章を比較し検討してみようと思う。次に掲げるのは、思考する「私」について思考している二人の文章である。

「この「私」なるもの、即ち私をして私であらしめるところの精神は、身体と全く別箇なものであり、なおこのものは身体よりもはるかに容易に認識されるものであり、またたとえ身体がまるでないとしても、このものはそれが本来有るところのものであることをやめないであらう……。」(『序説』p. 42)

「「私」というものは、私の思考(en pensee 意識)のうちにある。だから(donc)、もし私の母が私を生む前に殺されていたら、考える私というものはなかっただろう。してみると私の存在(être)とは必然的なものではない。(135—469)」

この二つの文章で、彼らは共に、「私」なるものは「思考」のうちに
にあるという、同じところから出発しているのであるが(パスカルが、デカルトの「エゴ」の価値を正当に評価していたことは、彼の『幾何学精神について』のなかで明らかである。p. 338 A)、デカルトの問題にする「私」が終始して「精神」存在であり、「私」という精神が、自分という精神を見つめている、あるいは、「私」という精神を、デカルトという精神が見つめている(だからこそ、身体がなくとも、自分は本来あるところのものだと言う)のに対し

て、パスカルの「私」という精神は、「だから donc」という接続詞以後、自己のなかに肉体をしか見ていない。パスカルの視線は、丁度外界をなぐる具合に、自分の存在 *un être* に向っている。パスカルの「精神」には常に肉体が付着しているのだ。

ぼくは先に、パスカル自身が現実を多様にし、無限を生みだすのだと言った。この人間はまた、外界（自然）をそれ自体で存在するものと考え、外界に独立した秩序を見る。しかも、右の引用からも分る通り、自分自身を反省するとき、彼の精神は自己のうちに肉体をしか見出さない。このような「精神」の働きを、ぼくらは、ぼくらのよく知っている言葉で「意識」のそれだと呼ぶ。

意識とは、視線のような存在であり、他を見ることによって自己を意識する（他と区別する）のだから、それが見た（つまり意識した）というまさにそのことのために、その見られた物は、彼（意識）から遠ざかり、「外物」という名が与えられる。そして彼が一つの物をよりよく見ようと努めるのに比例して、その対象物は彼から遠のいてゆくのである。だからこそ、物事の究極と根源とを求める彼は、外界に「二つの無限」を生じさせ、また自分を反省するとき、自己の偶然な肉体存在を見出し……かくして人間が人間にとって不可解な怪物となる。「人間は人間自身にとって自然における最も不可思議な対象である。何故なら、彼は肉体とはどういふものであるか考えることができない。精神とはどういふものであるかはさらに考えることができない。いわんや肉体が精神といかに結合しうるかは全然考えることができない」（199—202）。さらに、この意識が意識を

反省するとき、自分が自分にとって分らなくなる。「私の語る事柄を考えるとこのの、そしてあらゆることを反省し、自分自身を反省するところの、しかも他のものと同じく自分自身をも知らないところの、私の一部分とは何であるかを、私は知らない（227—194）」。「私」とは何か」と題した断章がある（688—693）。ここでは、自我が自我を否定しているのであって、意識存在たる人間は、ついに自己の存在を怪しむに至っている。

「一人の男が通行人を見るために窓に寄っている。そこへもし私を通りあわせたとして、私は彼が私を見るためにそこにいるのだと言いうるか？否。何故なら彼はとくに私のことを考えているわけではないから……。もし人が私を、私の判断力の故に、私の記憶力の故に愛するとしたら、人は私を愛するのだらうか？この「私」を？否。何故なら、私は私自身を失わずに、そういう特性を失うことはありうる。してみるとこの「私」は、肉体のうちにも魂のうちにもないとするなら、一体どこにあるのか？……」

「パスカルの思考」という言葉は、対象（それ自体で存在する外物・外界）の本質（根源・究極・秘密等々と彼の呼ぶもの）に到るために、丁度タマネギの皮をむくようにして、対象から「現象」（*choses*、事実、目に見えるもの）をはずとってゆき、結局「芯」というものにたどりつけない「意識」の行動（動き）を表現する言葉である。意識存在は、他へ視線を向けることによってのみ存在するのであり、自分に視線を向けると自分が消滅するから、それ自体で存在する外物（外界）に憧れるが、決して外物のような存在を得る

ことができず、かえって外界に脅かされていると感じる。またこの存在は自分の肉体を見、それを根拠付けることができないから、自分の存在の偶然性に気づき、自分を余計者と考える。彼は死を恐怖する。しかも現実の生は、人間の自尊心と自尊心との戦いの場であるから（意識存在にとっては、他人もまた、外界と同様、覗い知れぬ対象である）「他者地獄」ともいふべきものとなっている。

ここでばくりに予想できることは、右のような不安を知る意識存在が初めて慰めと安らぎとを得るのは、それ自体で存在し、自己原因であり、しかも全ての事物の根源であるような存在、 $\wedge$ 私 $\wedge$ の外部にあり同時に $\wedge$ 私 $\wedge$ 自身でもあるような存在を、彼（意識）が所有するとき、あるいはそういう存在と一体となるときのみであろうということである。

次章をまずこの予想の吟味から始めよう。

第二章 神

誰れかがキリストは真理の外に在る、真理は確かにキリストを除外する、と私に証明したとしても、私はキリストと一緒にいたい、真理と一緒にいたくない。（ドストエフスキー）

『ド・サンシとの対話』の一節に、「定義そのものからして無限であるこの至高の存在云々（D. 294 A）」というのがある。ぼくが本章を $\wedge$ 神 $\wedge$ の定義から始めるという無謀で無益に見える企図を抱いたのは、パスカル自身が定義という言葉を使っていたからである。しかし、パスカルが『パンセ』のなかで、神を「無限」だと形

容するとき、彼は必らず前もって人間の側の現実（ここでは、人間存在の「有限性」）を明らかにしている。つまりパスカルの光は、人間の存在の状態の一角を照し出すとともに、この光はさらに無限の彼方なる神のところにまで達して、神の構造の一面を浮かびあがらせるのである。従って、ここでとりあげる二、三の「定義」とは、このパスカルの照明が頭わにした神の構造の二、三の特質、というほどの意味である。

まず神は「無限」で「不変」で「永遠」かつ「必然的」な存在である。前章で引用した「私は必然的な存在ではない、もし私の母が殺されていたら云々」の断章の続きに「私はまた永遠でもなければ無限でもない。しかし自然には、必然的で永遠かつ無限な存在があることを私は明白に見る（135—460）」とある。また断章148—155には、「何故なら、無限の深淵は、無限で不変なるもの、即ち神そのものによってのほか満たされえないのであるから」と言う。

また神は、二つの無限（大の無限と小の無限）の相合う地点に存在し、事物の向う唯一の「目的」でありそのよってくる「原理」であり、全ての事物の創造者である。「自然にあって人間とは何か。無限に較べれば虚無、虚無に較べれば全体、無と全体とのあいだの中間者。両極を把握することからは無限にへだてられているので、事物の究極とその根源とは、人間にとって覗い知れぬ秘密のうちにどうしようもなく隠されている。……この両極は互に離れているが故に触れあい結びつき、そうして神において、ただ神においてのみ、互にめぐりあう（159—172）」。「いかなる宗教も、その信仰において、神を全ての事物の原理としてあがめず、その道徳において、ただ神

のみを全ての事物の目的^{すべ}として愛さないものは誤っている (833—467)。「全ての事物は虚無から出て無限に向つて運ばれてゆく。

誰れがこの驚くべき運行についてゆけるか？これらの驚異の創造者はそれを知っている。他の者は誰れも理解できない (198—72)。」

さらに神は「普遍的」な存在であり、その上、前章で見たような意識存在である人間に愛しうる対象として、神は「人間の内にして外」なる存在である。「真の、そして唯一の徳とは、自己を憎むこと……そして本当に愛すべき存在を探し求めそれを愛することである。しかしぼくらは、自分以外のものを愛することができないのだから、ぼくらの内にありしかもぼくらではない存在 (un être qui soit en nous, et qui ne soit pas nous) を愛さなければならぬ。このことは、全ての人間のめいめいについて真理である。ところで左様な存在は普遍的な存在者のほかにない。神の国はぼくらの内にある。普遍的な善はぼくらの内にあり、ぼくら自身であり、しかもぼくらではない (564—485)。」「幸福は、ぼくらの外にもぼくらの内にもない。それは神のうちに、ぼくらの外にして内にある (407—465)。」

しかし事實は、このような神を、パスカルは決して宇宙の彼方に見出しはしなかった。既に述べたように、彼は「実証的・機械論的」自然学者であつたから、宇宙を「物」としか見ず、古代人のように靈感に満ちた「天」と見ないばかりか、むしろ宇宙は彼の恐れの対象であり、無意味で不気味な存在であつた。このことは例の有名な一句がよく表明している。《Le silence éternel de ces es-

paces infinis m'effraie. (201—206)》

ヴァレリーは書いている。「パスカルは無限空間のうちに、沈黙しか見出さない。彼は自分が『おびやかされている』と言う。この世界の中に打ちすてられていると嘆く。彼は宇宙のうちに、予言者エレミヤの口をかりて『われは天と地をみたす者である』と語つた者を見出そうとしない。この奇妙なキリスト者は、諸天のうちに聖父を認めない。」(『パンセ』の一句を主題とする変奏曲)

ここでパスカルの神の定義にかえる必要があるのである。例えば次の断章。

「ぼくらは、有・限・な・る・もの・の・存・在・と・その・本・性・と・を・知・る。何故なら、ぼくらはそれと同様有限であり拡がりをもつから。ぼくらは無限なるものの存在を知るが、その本性については知らない。何故なら、それはぼくらと同様拡がりをもつが、ぼくらのような限界をもたないから。しかしぼくらは神の存在もまたその本性も知らない。

何故なら、神は拡がりをもたず限界もまたないから (418—233)。」

右の断章で、「無限なるもの (l'infini)」とあるのは、正確に言えば、「無・際・限 (l'indéfini)」の概念を指していると思われる。「無・際・限なもの」とは例えば数であつて、ぼくらは数が無・際・限であることを知っているが、その本性(例えばそれが偶数なのか奇数なのか)を知らない。彼が「無限な空間」を恐れるとき、その空間とは無・際・限に拡がった宇宙のことである。

また右の断章で彼が「神」と書いているのは、数学で言う「無限」であり「超・限 (le transfini)」のことである。「無・際・限」に對比されるものは「一」であり「無限」に對比されるものは「無」で

あるから、「一」である人間は決して「無限」なる神と比較できず、従って神の存在を知ることもしなければならないその本性を知ることもしできないわけである。

以上のことから言えることは、パスカルは宇宙に無意味と無秩序と神の「沈黙」（あるいは神の不在）をししか見出さなかったこと、従って『パンセ』では、宇宙を、人間のたどりつけない、恐しい、無限なものに、また神を、人間の視い知れぬ、無限な、超越的な存在に、それぞれ表現せざるをえなかったということである。彼ははっきりと、神は「隠れたる神」であるとして書いている。

ここで、パスカルがすでに青年期に、ジャンセニウスの教義を受け入れていたことを思い出そう。何故神が隠れ、人間には視い知れぬのか、この説明のために、彼は人間の墮落と原罪とを主張するのだ。彼の場合、「原罪」は理屈ではない。「原罪は人々の目から見れば愚かなものである。しかし原罪は、そういうものとして与えられているのだ。それ故諸君は、この教義が道理を欠いているといって私を非難しないでほしい。というのも私はそれを、道理を欠くものとして説くのだから。しかしこの愚かは、人間のどんな知恵よりも賢い。何故なら、この愚かなくして、諸君は人間をどう説明するのか（695—495）。」確かに「原罪」は人間を説明するにしても、これはかえって神から人間を決定的に遠ざけてしまう結果を導くのである。「それ故ぼくらは、神がいかなる存在なのか、また神が存在するのか否か知ることができない。そうであるなら、一体誰れがあえてこの問題を解こうと企てるであらうか？神と何のつながり（rapport）をもたぬぼくらにはじきぬ（418—233）。」しかしこ

のつながりを、果してぼくらはもたないか？

いわゆる「決定的回心」以前のパスカルの信仰については、ぼくの読みえた限りでは、モリーヤックを除いて、神の「知的な」理解にとどまっていたと大方の研究者がいう。ぼくはもちろんそのいずれが真実であるか決めることができないし決める意図ももたないのであるが、モリーヤックのエッセエを興味深く読んで、神の「知的な理解」が人を信仰へ導きはしないことを学んだ。「回心」が二度であらうと一度であらうと、一六五四年一月二三日の夜以来、パスカルがイエス・キリストなしでは生きられなかったこと、この点では全ての意見が一致している。

ひとくちにパスカルの信仰といっても、次の三つの時期がその準備を行なったことを記憶しておく必要がある。彼は幼年期から、宗教的な家庭が授ける教義的な宗教教育を受けていた。彼は父を敬愛していたから、父の教える言葉を素直に信じただろう。また青年期の初めに、彼が二人のジャンセニストと知りあって学んだものは、神のみを生活の中心とする彼らの信仰生活のあり様であった。さらに「社交時代」なる期間に、彼は生涯愛してやまなかったロアネス公を得ている。パスカルの愛は、「人がもし私に愛着するとしたら、それは正しいことではない（396—471）」と書きつけ、自分の身近かにその紙片を置いておかねばは抑えられぬ類のものであった。「イエス・キリストなしでは生きられない」とは、彼がそんな愛着をキリストに抱いていたということである。

しかし、ぼくはどうやら先走りをした。先の引用の末尾に、「神

と何のつながりもたぬぼくら」とあった。パスカルはキリストのうちに、このつながり *rapport* を見出したらしい。彼は『パンセ』の随所で、イエスを *médiateur* (媒介者) と呼んでいる。

こういう言葉がある。《Jesus Christ is what He does and does what He is》この一句は、まずキリストは人であると言っている。このイエスは、自分が『パンセ』で描き出したような人間のあらゆる喜びや悲しみ、悲惨と栄光とを知悉した人である、彼は人間のあらゆる心理に通じ、一瞥のもとに見抜いた相手の心の底を正直に語ってみせる、その語りくちは子供のように素直で不思議にぼくらを傷つけない、その視線は静かで思い遣りがこもっている、この人こそ「謙虚について謙虚に語りうる」実に稀有な人だと、福音書を読んでパスカルはそう考えなかつたろうか。句の後半は、そうしてこの人間は神であると言っている。そういう稀有な人が、神は人の心のなかにあると教え、自分の言葉を信じる者は新しい生命を得ると説き明かし、自分をきっぱりと神の子だと言うのであつてみれば、自分はこの人の言葉が信じられるから、確かにこの人は神であると、彼は信じなかつたろうか。

キリストを *Verbe* といひ *Logos* と呼ぶのは実に興味深いことだと思ふ。このキリストという人間はほとんど言葉でしかない。この精神は肉体を極度に欠いている。彼の言葉を信じないでは、彼はただの紙片にすぎないのである。しかし人が彼を信じるとき、彼の言葉は、つまり彼は、受肉する。こんな存在を、ぼくらはかつて想像しえたらうか。

ぼくらは物のような、それ自体で存在する存在を知っている。し

かしこの存在(外界)は、ぼくらをただおびやかすだけであつた。ぼくらはまた他に問いかけることによってのみ存在し、自己を問題とするときこの自己は外物となつてもはや自己に属さなくなり、自己が無となつてしまふ、そういう意識存在を知っている。しかしこのキリストという存在は、もともと紙片に印刷された文字にすぎない。がぼくらが視線をむけるとき、この存在は外物のようにぼくらをおびやかもしなければ、ぼくらから無限に遠ざかりもしない、それどころか、ぼくらがこの言葉でしかない存在を読みすすむ(『理解する』とは結局信じることになるが)につれて、この言葉は一層堅固な肉体となつて、ぼくらの眼の前に、(あるいは眼の中に)存在をはじめる。しかもこの存在はあの思い遣りのこもつた目でぼくらをみつめる。この存在は、ぼくらの外にあるからぼくら自身ではない、しかもぼくらの内にあるからぼくら自身でもある。この存在においてのみ、意識は自己を失なわずに自己を所有するのだ。キリストは信仰によつてしか存在しない存在である。パスカルはこれを実在(*réalité*)と呼んだ。

もうすでに明らかであろう。彼は書いている。「その宗教は、一人の人間によつて全てが墮落し、神と人間との間のつながり (*liaison*) が絶えたこと、また一人の人間によつて、そのつながりが回復されたことを教える (205—489)。」

パスカルの神が、イエス・キリストの神であつたこと、彼の信仰がイエスから始まることを、次章においてぼくらは彼の『メモリアル』のうちに読むであらう。彼が『パンセ』で語るイエスについては、さらにそののちに(簡単にではあるが)研究してみたい。

第三章 『メモリアル』

《Donc, la vérité est à Pascal et l'image
à nous.》(J. Demorest : Dans Pascal)

『メモリアル』を注意して読めば気づくことであるが、そこに書かれた言葉のさす内容は均質でない。ハックスレーの用語を借りれば、当夜の直接経験(direct experience)を示す層と、その経験の知的解釈(intellectual interpretations after the fact)の層とが互いに交錯しているのである。ぼくはこの直接経験の層にあたる行に下線を施しておいた。(章末参照)

(A) 最初の「火」(Feu)という言葉で、ぼくらは「純粹経験のただ中に立つ。(ハックスレー)しかしぼくはここで「火」について、自分の揣摩臆測を述べるつもりはない。ストロフスキーとモリーヤックの説を紹介しておこう、ぼくには二人の見方が妥当だと思われるから。

「パスカルが火と書いて焰とは書かなかったこと、啓示乃至は見神を得たのではなく、彼の失意のどん底の心にふたたび活を与えた熱を感じたということに注意しよう。(ストロフスキー)」「パスカルが肉眼で本当に火を見たとは思われない。かのエンマウスの夜、使徒たちも「主が聖書を読き明かしておられるあいだ、われわれの心は燃え立っていたではないか?」と語りあったものであった(ルカ24章32節)。パスカルも、この二時間のあいだ、己が魂が燃え上がるのを感じた。(モリーヤック)」^(注2)

(B) 次の二行の解釈の層と、その次の Certitude の一行とを読

むとき、この夜の経験が、ひとつの vision (見神) をではなく、神の直観を主な内容とするものであったことが推察できる。「火」という言葉は、恐らくこの夜の全経験を要約してみせたものであったろうが、この言葉だけでは彼はもどかかったに違いない。自分は、哲学者や学者の神ではなくて、「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神(出エジプト3・6／マタイ22・32)」を確実に直観したというのである。Sentiment とは、sentiment de coeur (110—282) (「心情の直観」)の意であろう。(ちなみに、ベンギンの英訳では、heartfelt となっている。Tr. by A. J. Krash-eimer) Certitude とは「直観からくる確実さ(ブトルウ)」であり、そこから彼の「歓喜」と心の「平和」とが生まれたのである。後に彼は書いている。「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神、キリスト教徒の神は、愛と慰めの神である。抱かれる人々の魂と心とを満たしてくれる神である。人間の悲惨と神の無限のあわれみとを心の内に感ぜしめる神である。自らを人々の魂の根底に結びつけ、その魂を謙虚と歓喜と信頼と愛とで満たし、人々をして神の何か目的を持ちえなくする神である。(449—456)。」

(C) 次の解釈の層は、彼が直観した神をさらに明確に表現している。「イエス・キリストの神。わが神にして汝らの神(ヨハネ20・17)。汝の神はわが神とならん(ルツ1・16)。」(ヨハネによる福音書のなかで、「わが神にして汝らの神」と言ったのはイエスである。すると汝とは、ここではパスカルのことになる。また「ルツ記」で「汝の神はわが神とならん」と言うのはルツであるが、ここではパスカルが言うのだとすれば、「汝」とはイエスのことにはな

るまいか。)やうに、彼のなまな心理的経験(immediate psychological experience バックスレー)を表わす「神以外の、この世及び一切のものの忘却」という一行について、「神は福音書に示された道のみに見出される」という重要な一句がある。ここから、前章でぼくが述べた事柄が明らかになるだろう。パスカルの場合「イエス・キリストの神」はまたとくに「イエス・キリスト」自身であつた。「ぼくらはイエス・キリストによつてのみ神を知る。この媒介者なくしては、神とのいかなる交りもない。……このことをよそにして、聖書がなく、原罪がなく、また約束されやうて来たこの必要なる媒介者がいなければ、人は絶対に神を証明することができないし、正しい教理と正しい道徳とを教えることができない。それ故、イエス・キリストは人々の真の神である(169—547)。」

「無限」な神と「悲慘」な人間とを結合するというイエスの思想は、パスカルには決して考えつくことのできなかつた解答であるとは言えぬかもしれない。しかし大切なのは、すでにそれを実行した人がいるということである。イエスは、福音書のなかで極めて感動的にこの結合を生きた。それなら、自分はこのイエスの福音を信じよう、この人が信じられるから、自分は非合理的な奇蹟も信じられる、決してその逆ではない。ここからパスカルの信仰が始まるのである。「聖体等を信じないなどという愚かさを私は嫌う。もし福音書が真実なら、もしイエス・キリストが神なら、そこにどんな困難があるというのか?(168—222)。」

(D) 「人間の魂の偉大さ」とは、彼がこのように神を認識しうる人間の魂に思いをはせたことだろう。彼はもう自分が神を正しく知

ったことを疑わない、△正しき父よ、世は汝を知らず、されどわれは汝を知れり(ヨハネ17・25)。▽彼は自分もまた正しく神を知る魂を与えられていることを思い、神の祝福のようなものを感じて気持が高揚したのかもしれない、Joie. Joie. Joie……と書きつけている。

(E) 幸福のさなかにあると、必らず、ぼくらはこの幸福を誰れかがやがてとりあげにくるだろうと想像し、誰れかの影が動いたように思い不安におびえるものだが、パスカルも「歡喜」のなかにあつて、自分が再び神を離れる時が(あるいは神が自分を見捨てる時が——これは同じことである)くるのではないかと恐れている。彼には周知のように、「社交界にいらした頃には、浮々とおすごしになつて」とか「お兄さまが、あんなにもわれをわすれるまでにはまりこんでおられた泥沼の悪臭云々」と、妹のジャックリースが書いているような、いわゆる「社交時代」なるものがあつたから、彼は自分の過去の生活を思いだしたのだろう「私は彼から離れていた」と嘆く。△生ける水の源なるわれを捨てたり(エレミヤ2・13)▽そんな非難めいた声が、どこかで聞えたのかもしれない。△わが神、われを見捨てたもうや(マタイ27・46)▽これはキリストの言葉であるが、同時にパスカル自身がキリストに哀訴する言葉でもあつたらう、だから彼は「願わくば私が永久に彼より離れざらんことを」と祈願の文章を綴る。「パンセ」に次のような一節がある。「まことの回心とは……自分はこの存在者なくては何事もできないこと、自分はこの存在者の寵愛を失うに値しただけの人間にすぎないことを認めるところにある(378—470)。」

(F) 次の二行は、「火」の一語が彼の直接経験の層を圧縮し要約してみせているのと同じ働きを、解釈の層に行なっているのだと言えよう。彼はキリストの言葉（ヨハネ17・3）を改めて確認するように書いている。△永遠の生命は、唯一のまことの神にいます汝と、汝のつかわしたまえるイエス・キリストを知るにあり。▽信仰生活が永遠の生命なのである。

(G) 右の二行の終りに *Jésus-Christ* と彼のペン先が書きつけたとき、彼の視線と注意力とがこの J.-C. の二文字に停止し集中したのだと思う。彼の想像力は（あるいは追憶は）様々な感情をともなつてしばらくはこの文字の周辺を舞って落ち着くことがなかったかもしれない。諸々の感情が徐々に一焦点に集斂し高まって来、ついに爆発したかのように次の二行がある。 *Jésus-Christ. Jésus-Christ.* 「パスカルが『メモリアル』のなかほどにイエズスの御名を二度までも書きつけたその瞬間、彼の心に映じたのは人性としてのイエズスであった。それはもはや神ではなく、人となり給うた神である。……人の中の人。万人に代つて彼らの罪を一身に荷い、もっとも親しい友達からも棄てられ敗れて、ただひとり、夜の恐怖の中に立つ御者である。（モーリヤック）」だからこそ、彼が再び「私は彼から離れていた」と書くとき、先（E参照）のにはなかった文章が付加されているのだらう、「私は彼から逃れ、彼をうち捨て十字架につけた。」「どうか私が決して彼から離れないように。」何故なら、「イエス・キリストなくして、人は不徳と悲慘のうちにあるより他ない。イエス・キリストと共に、人は不徳と悲慘とからまぬかれる（416—546）」からである。

(H) 次の文章が、Cの最後の行と異なっている箇所（C） *Il ne se trouve que...* (H) *Il ne se conserve que...* に注目した。先のが意味するところはこうであった。「自分の知った真の神はイエス・キリストの神であり、従つて神・人キリスト自身であつて、この神は福音書のなかで示された彼の行為においてのみ見出される。何故なら、彼の行為が彼をつかわした神を証明しているからである。」ここHでは、前者を受けてさらに続けている。「このキリストは、福音書で示される彼の行為と態度の一つ一つを真似ることによつてのみ保たれる。」彼はここで、信仰とは実行でありそれ以外ではないと言っている。ぼくらがある人について「彼は信仰を持っている」といわれるのを耳にすると、まるでその人が「信じ尊ぶ心」を持っているかのように想像するのであるが、「心」などというものは、人間の裡のどこにも存在しないのであつて、その人のする一連の行為があり、その行為の全体をひとつの名称で呼ぶとき「信仰」としか名付けようがないので、あの人は信仰を持てている、ということになる。しかし、人は決してこの行動を自分から決意して起すことができない。丁度音楽が、ぼくらの裡にあってぼくらを衝きあげ新しい行動へと誘うように、「神」がぼくらの裡にひとつの感情を吹き込み、これが信仰の行為へと仕向けるのでなかったなら。パスカルはこのことを「恩寵文書」のなかで、信仰とは神の賜物、というアウグスチヌスの言葉をひいて説明している。パスカルの裡にこの「感情」を吹き込むのはイエスなのであり、だからこそ彼は極端にイエスを愛したのであり（彼もドストエフスキーのように「自分は真理（神）」と一緒にいたくない、キリストと一緒にいた

い」と言ってもよかったのである）、キリストを常に心に感じてい
る必要があった。このためにキリストの道を真似るのは信仰を持続
する（彼がローネス兄妹にあてた手紙に「何故なら、信仰（la piété）
のうちにあって持続するのを見るのは、信仰に入るのを見るよりも
一層まれなことですから」という一節がある（p. 268 A））方法でも
あり、また逆に彼の信仰の証明であり、また神の存在証明ともなる
のである。何故なら、彼が行動している以上、この行動を内から鼓
吹する「神」がいないはずがないではないか。さて彼の実行はこん
な風であった。「私は貧しさを愛する、何故なら彼がそれを愛され
たから。私は富を愛する、何故なら富は、貧しい人々を助ける手だ
てを私に与えてくれる。私は全ての人々に忠実を守る。私は人々に
悪を報いない。むしろ私は、人々の側から善をも悪をも受けない私
の状態と同じ状態に、彼らもなつてほしいと思う。……そうしてた
だ一人にいるときでも、人々の前にいるときでも、私は自分のいか
なる行動をするときでも、神の視線を感じる。神は私の行動を裁か
れるに違いないし、私は神に自分の行動の全てを委ねる（931—
550）。」

(I) 以上が彼の「回心」の出来事であった。これはキリストへの
「全き心地よき自己放棄」に完成する。

(J) 最後の三行は、後日彼が書き加えたものであるという。「ま
たわが指導者への全き服従」とあるのは、彼が現実教会のあてが
ってくる指導司祭の下で、自分の信仰を実行するという覚悟を書
き記したものであらう。

L'an de grâce 1654,

Lundi, 23 novembre, jour de saint Clément, pape et
martyr, et autres au martyrologe,

Veille de saint Chrysogone, martyr, et autres,
Depuis environ 10 heures et demie du soir jusques
environ minuit et demi.

(A) *Feu.*

(B) <<Dieu d'Abraham, Dieu d'Isaac, Dieu de Jacob>>
non des philosophes et des savants.

Certitude. Certitude, Sentiment. Joie. Paix.

(C) Dieu de Jésus-Christ.

Deum meum et Deum vestrum.

<<Ton Dieu sera mon Dieu.>>

Oubli du monde et de tout, hormis Dieu.

Il ne se trouve que par les voies enseignées dans
l'Évangile.

(D) Grandeur de l'âme humaine.

<<Père juste, le monde ne t'a point connu, mais je
t'ai connu.>>

joie, joie, joie, pleurs de joie.

(E) Je m'en suis séparé :

Dereliquerunt me fontem aquae vivae.

<<Mon Dieu, me quitterez-vous?>>

Que je n'en sois pas séparé éternellement.

(F) <<Cette est la vie éternelle, qu'ils te connaissent seul

vrai Dieu, et celui que tu as envoyé, Jésus-Christ.》

(g) Jésus-Christ.

Jésus-Christ.

Je m'en suis séparé ; je l'ai fui, renoncé, crucifié.

Que je n'en sois jamais séparé.

(H) Il ne se conserve que par les voies enseignées dans l'Évangile.

(I) Renonciation totale et douce.

(J) Soumission totale à Jésus-Christ et à mon directeur.
Éternellement en joie pour un jour d'exercice sur la terre.

Non obliviscar sermones tuos. Amen.

第四章 イエス・キリスト

《Qui ôte Jésus-Christ à Pascal lui ôte tout.》(A. Suarès : Trois Hommes)

パスカルが『キリスト教弁証論』の執筆準備を始めたらしいのは、彼の「回心」の三年後、彼三十四才の頃であったが、その翌年彼はポール・ロワイヤルで、この『弁証論』の構想に関する講演を行なった。次の引用は、彼の友人で、この講演を記録したフィヨール・ド・ラ・シェーズの伝えるパスカルの言葉の一部である。

『イエス・キリストについて予言が全くなくとも、また奇蹟が行なわれなかったとしても、キリストの教義と生涯の中に、極めて神

聖なるものが存在しているので、少くともそれらに魅惑されないではいられないし、またイエス・キリストへの愛なくしては、真の善徳も心の正しさもないと同様に、イエス・キリストへの讃仰なくしては、高尚な知性も高雅な感情もない。』

パスカルの信仰がイエス・キリストとの出会いに始まったことは前章でみたところであるが、彼の『パンセ』もまた、この「イエス・キリストへの愛」をその執筆動機とし、彼にならうていえば、『パンセ』のどんな矛盾する章句も、この「愛」という一点に会合する。彼の所有する「ひとつの意味」(257—684)はこの「愛」である。予言がなく奇蹟がなくとも、キリストの教義と生涯の中に、極めて神聖なるものが存在すると彼は言う。ぼくらは次のような断章に、彼がキリストの「極めて神聖なるもの」を見出しているのを知る。「イエス・キリストは重大な事柄をいかにも単純に話すので、その事柄については、彼がまるで考えたことがなかったかのように見える。また、そのくせいかにも簡潔に話すので、彼のその考えているところが実によく分る。この素朴さに加わった明晰さには驚くべきものがある(309—797)」。彼のここでの驚きは、あの子供の如くに純真で、かつその寸鉄は人をさすかの如き心理観察家であるマイシユキンを知る、『白痴』の他の人物たちの驚きに似てはいないだろうか。彼等がマイシユキンに抱く愛着は、パスカルのキリストへの愛着に似てはいないか。彼の「驚き」は、「極めて神聖なるもの」が彼の裡に吹き込んだ「愛」(la charité)のひとつの表現である。

「愛」は、彼の信仰を生んだとともに、彼の信仰の持続を支えてもいる。だから「愛」を、Verbe (言葉) を受肉させる情熱と言つては当たらないか。何故なら彼のキリスト (Verbe) は、「墓」の中でのみ受肉するのであるから (550—553)。キリストは死んだが、まだ十字架の上で衆目の下に晒されている、だから彼が復活するのは、そこではないと彼はまず断つてゐる。「彼は死に墓のなかに隠された。イエス・キリストは聖徒によつてのみ葬られた。イエス・キリストは墓のなかでは何の奇蹟も行なわれない。そこに入るのは聖徒のみである。そこにおいてこそ、イエス・キリストは新たな生命を得るのであつて、十字架の上ではない。これは受難と贖いとの最後の神秘 (mystère) である。」

彼の使うところの「神秘」は、ぼくらの知つてゐるこの言葉の用法とはまるで違ふ。「神秘」とは、不可思議、不可解なものの意ではない。彼はまるで、自分のような愛がなく信仰がなければ、諸君にとつて「神秘」は実に不可解なものになるだらうと言つてゐるやうである。

パスカルは「パンセ」のなかで、決して無神論者を説伏しようとは考へていなかったやうだ。彼はむしろ、信仰ある者となひ者とを峻別し、すでに信仰 (raisonnable 敬虔) を持つてゐるそれに気づいていない人々を見つつけようと試みてゐるのである。彼は書いてゐる、(人は彼の言う「心情 (le cœur)」を、いかにもパスカル一流の用語として解して、自分を信仰とは無縁なやうだと考へるが、彼の言う「心情」は人間の精神の一器官を指している——「心情」は信仰を容れる一器官である——にすぎないのであつて、これはみんなの人

々が持つてゐる。「心情」の有無が、信仰の有無を示してゐるのではない。」「心情は普遍的存在に、あるいは自己に専念するに依じて、自ずから普遍的存在を愛し、あるいは自ずから自己を愛する。そして心情はこの選択によつて、それらの一方あるいは他方に対してひややかになる。君は普遍的存在を棄てて自己をとつた。君が君自身を愛するのは理性によつてであるか? (293—297)」「彼は諸君に信仰ある者の非合理的な行為を嘲う資格はないというのだ。キリストは死んで聖徒によつてのみ葬られた、といへば、懷疑家の諸君はすぐこれを懷疑のたねとするであらうし (655—377)、自分等はここに「神秘」を見る。彼は「パンセ」のなかで、「二種の人々」といつて自他を区別する。彼の「隠れたる」神が現れてくるのはここからである。「もし人が、神はある人々を言にし、他の人々の目は開けたといふことを原則として認めない限り、神の業について何事も理解できない (333—366)」。彼の神は、求めようと求めまいと全てのの人々にとつて真理であるやうな神ではなかつた。

パスカルは、人間がいかに悲惨であることを、これでもかと言わんばかりに証明してみせたが、「しかし」と言つて、彼が「悲惨」を追求して止まない精神の働きにふりかへつて目をとめ、「このことを認識する点で人間は偉大だ」と言つた、この論法に注目しよう。彼の神は常に「うめきつつ求める」 (405—421) 行動を邁つてみれば見出されるであらう。神は、人間が一步神に向つて歩むと、一步人間に向つて歩んでくる。だから彼はミトンを非難してゐる。「神がミトンに近づくであらうという時、動こうとしない彼を非難すること (363—193)」。これが彼の『アポロジ』の論法である。

そして彼のこの論法は、やがて(例えば『恩寵文書』)次のような「Sicut」をとるようになる。「今は神を知り、むしろ神に知られたるに……(パウロ)」(ガラテヤ4・9)

多くの人々を感動させる「イエスの秘義」(919-953 et 791)は、パスカルが(あるいは、人間が)神へ向って一歩二歩前進するのに比例して、神が一歩二歩歩んでくること、つまり「イエス・キリストへの愛」とは即ち「神の愛」であることを物語っている。事実、この断章を注意して読めば二部に分たれるのであって、前半が彼の(人間の)イエスへの愛が綴られているのに対し、後半は神が彼に愛をもって答えてくるのである。そして、「心を安んぜよ、汝がすでに私を見出しているのになかったなら、汝は私を探しはしなかったらう。」この一句で、人間と神との間の共同の、描かれつつあった円環が完結する。

この完結した円環を比喩的に表現したものが、「考える手足」(des membres pensants)と名付けられた一連の断章である。彼は人間の個々は、ものを考える「手足」であって、この手足は、イエス・キリストという「胴体」を離れては、「生命と存在と運動」とを持ちえないと書いている(372-483)。ここで思い出されるのは、「イエス・キリストなくして世界は存在しないであろう。何故なら、世界は破壊されか、地獄のようになるかのいずれかであろうから(449-556)」という彼の激しいが一見不可解な言葉である。何故世界は存在しないのか? イエス・キリストが無かったにしても、世界は現に存在しているのではあるまいか。しかし、再び例え

として言及するが、ここで「ロシアのキリスト」だというムイシュキンのような人物の存在を想定してみよう。ぼくらがあの人物を知ったとき、こういう人がどこかにいそうなものだ、いやどこかにきつてはほしい、と願っていた人間に邂逅した思いがしなかったらうか。世界の秩序は、みんなの人がそれぞれ内に持っているこの願望と理想とによってのみ、そしてこれらのためにのみ、保たれているのではあるまいか。実際この願望と理想とが、世界が壊滅し、あるいは他者地獄となることから、幾分、救っているようではないか。してみると彼が、右の断章の続きに「世界は人々に神を教えるために存在するのではない、『そうではなくて、世界はイエス・キリストによってのみ、イエス・キリストのためにのみ存在するのだ』」と言うとき、彼は多分正しいのである。彼はキリストを人間社会の中心に据えようと考えているのだと、ぼくは思う。「考える手足」を持つ「胴体」とは、従って彼の内面の「教会」であった。

(完)

(注記)

- (1) 筆者の用いたテキストは次の通り。パスカルの作品への言及
或いは引用の際の頁数は、この書による。

Pascal : Oeuvres complètes (l'Intégrale) Présentation et notes de Louis Lafuma (Aux Éditions du Seuil)

『ペンヤ』分類番号は Lafuma 版——Brunschvicg 版を併記した。

- (2) Aldous Huxley : Do What You Will (p. 250-254)

フォルチュナ・ストロフスキー『フランスの知慧』(岩波書店)

森、土井他訳) p.195

フランソワ・モーリャック『バスカルとその妹』(理想社 安

井、林訳) p.133 p.142

なお、『メモリアル』のテキストに(A)(B)……(J)なる符号をつけたのは、筆者の読み方を示すとともに、本文中での言及を便利にするためである。